



Dumas fils

A. Daudet

G. d'Annunzio

LA DAME AUX CAMELIAS
SAPHO
TRIONFO DELLA MORTE

利勝の死・オフサ・姫椿



ス・イ・フ・マユデ

エデオド

オイツンヌダ

版 出 社 潮 新

非・賣品

世界文學全集(30)

椿姫、サフオ

死の勝利

第十六回配本

昭和三年六月十日印刷
昭和三年六月二十日發行

翻譯者

高橋邦太
武林無想庵
生田長江

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所

新潮社

電話牛込

一八八八八
二〇〇〇〇
四九八七六
番番番番番

振替東京二三、四五〇番

解 説

(一) デュマ・フィスと『椿姫』

アレクサンドル・デュマ・フィス(一八二四—一八九五)は浪漫主義の巨匠『モンテ・クリスト伯』の作者アレクサンドル・デュマの息子である。父のデュマが自由なる想像を奔放に驅使して壯大なる作品を數多く書いたのに對してデュマ・フィスは極めて質實な筆致で、不屈な正義感を抱きながら、社會惡を描破して行つた。そして、近世寫實主義の先驅となつた。

デュマ・フィスは父のデュマが白耳義婦人に生ませた私生兒であつた。後に父のデュマはこれを認知し、その文才あるを知るに及んで大いに激勵した。父に對して非常に大きい尊敬を抱いてゐた彼が最初に書いた作品は浪漫的なものであつた。當時の彼を批評家ブリュヌチエルは「浪漫主義の後塵^{エビオス}を拜する者」と評してゐる。

彼は一八四八年に小説『椿姫』(a l'ame aux Camélias)を書いて、一舉にして大名を得た。これ彼が二十四歳の若きであつた。『椿姫』の最初に「作者は小説中の人物をつくり出す年になつてゐない」といふ意味の事が書いてあるのもこれに據るのである。

『椿姫』の女主人公は作中ではマルグリット・ゴオチエとなつてゐるが、これもデュマ・フィスを書いてゐる通り實在の人物で、本名をアルフォンジヌ・プレシスといふ。一八四五年頃の巴里に嬌名を馳せた麗人で、一八二四年一月十五日に生れて一八四七年二月三日に二十三歳で、肺を病んで死んだ。

この女性がいかに當時の人々に賞讃せられたかは、坊間流布のカルマン・レヴィ版、ネルソン版の巻頭に掲げられた

ジュウル・ジャンンの一文に詳かである。この中には作曲家として聞えたフランツ・リストが彼女を見て、その美しさに見惚れた事まで書いてある。

この小説が一度公けにせられて好評を博するや、世人はこれを戯曲として舞臺の上に見る事を冀つた。そこで一八四九年にデヌマ・フィスは八日間、脚色して、テアトル・イストリック座へ提出した。ところが同座が上演以前に閉鎖したので、本讀みの時に立會つた座附俳優イッポリト・ラルムスの手を経て、ヴォオドヴィル座へ提出せられた。しかるに一年間官憲によつて上演を禁止せられた。しかし種々の縁緯があつた後デヌマ・フィスに好意を持つたド・モリニイ伯の盡力で、一八五二年二月二日にヴォオドヴィル座で上演せらるゝに至つた。一度脚光を浴びると非常な評判で百日以上満員續きであつた。十九世紀に於いてユーゴーの『エルナニ』の上演と相並んで劃期的な成功であつた。一度浪漫主義派の戯曲によつて占領せられてゐた佛蘭西の舞臺は、寫實的な作品に取り戻されたわけである。

忽ちこの戯曲は世界各國で翻譯せられ、上演された。殊に佛蘭西に於いては名女優サラ・ベルナアルが女主人公に扮してその妙技を揮つたので一層名高くなつた。又戯曲のみならずヴェルディによつて歌劇『トラヴィアタ』として作曲せられ、更に映画化せらるゝに至つては世上『椿姫』の名を知らざる人無しと云ふも過言では無いであらう。

日本に於いても『椿姫』は夙に喧傳せられてゐる。恐らく最初文獻に現れたのは明治六年に成島柳北より楠田某氏に宛てた書翰であらう。そして作品としての翻案は、明治十八年三月天香道人閑、醒々居士（福島幾太郎）編の『新編黄骨日記』と思はれる。この書の序文には明かに歴山徳、戎馬の物せし小説によると斷つてある。

翻譯として完結してゐる最初のものは、加藤紫芳譯『椿の花把』である。

その後最も世に行はれた翻譯は明治三十六年五月、長田秋濤の『椿姫』であつて、恐らく“*La Dame aux Camélias*”と『椿姫』と呼ぶやうになつた最初ではあるまいか。森田太郎の著書には屢々山茶夫人として書かれてゐるが、これけ支

那に於いてかく呼ばるゝをその儘踏襲したものと考へられる。

これらの外に、内川魯庵、太田三次郎、福永漢、小山内薫、森田草平の諸氏の譯がある。いづれも各々長所を有して愛讀せられた。『椿姫』は恐らく今後大いに讀まるゝであらう。

デュマ・フィスはこの作以外にも多くの小説戯曲を書いた。しかし、いづれも社會の缺陷に對する一大痛棒であり、非難攻撃であつた。殊に戯曲に於いては近世の社會劇の先行者となつた。『金錢の問題』、『淪落の女達』、『私生兒』、『婦人の友』、『結婚の挨拶』、『オوبرリ夫人の思想』等の名篇を續々と書いた。

彼の文學觀は前代の浪漫主義のそれとは大いに異り、文學至上主義ではなくて、文學功利主義をとつてゐた。この點デドロオに近かつた。彼はかう書いてゐる、「あらゆる文學は道德化の爲めに、理想の爲めに、一言にして言へば人生に役立つ爲めに存するものである」と。一八七四年一月には選まれて學士院會員となり、一八九五年に他界した。

デュマ・フィスは父と異なる立場にあつたとはいへ、近代佛蘭西文學史上に残した彼の足跡はかなり大きい。恰も浪漫主義と自然主義とを結ぶ橋梁となつてゐるのが彼である。彼の後に、佛蘭西に自然主義運動が起り、ゾラ、ドオデモオ、バッサンが生れる。この『世界文學全集』で、既にヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』、『エルナニ』、『アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』、デュマ・フィスの『椿姫』、ギュスターヴ・フロオベルの『ボヴァリイ夫人』、ギ・ド・モオ、バッサンの『女の一生』を讀まれた方は、フロオベルの次にゾラの『居酒屋』を挾んで、もう一度年代順に讀み返されると、近代佛蘭西文學がいかにして浪漫主義から自然主義に移つて行つたかといふ事がはつきり分ると思ふ。

○
小説『椿姫』は一娼婦の戀物語である。哀しき情史である。しかしながら、こは單なる情痴の世界を描かんが爲めに作者アレクサンドル・デュマ・フィスが筆を執つたものではない。一農民の娘と生れた美貌の少女が生きなが爲めに餘

儀無く笑を賣るが、一たび純潔なる一青年と戀に落ちて、眞の愛に目覺めても、彼等の環境が、社會が、彼等の戀に幸ひせず、遂に病床に血を咯きつゝ、戀しき人の名を呼びつゝ、死に行く悲劇を書いて、作者は清く、弱き者の爲めに悲しみ憤つてゐるのである。

思ふに佛蘭西大革命によつて擡頭したブルジョアジイが「一世の英雄」ナポレオンを己が階級的利害の傀儡としてこれを操り、更に資本主義的機構を強固にし、一八三〇年の七月革命でルイ王を放逐して新王を迎立した直後の佛蘭西の社會には、かゝる悲劇を醸すべき各種の原因が既に備つてゐたのであらう。本來ならば嫁して妻となり母となるべき婦人が、社會の缺陷の爲めに己の容色を驚がなければならぬのさへ傷ましい事であるのに、世の中からは指彈せられて、正しい、潔い戀さへする事は出来ない。デュマ・フィスは文學を以て、風教の爲めに貢獻せんとした士であるから、この事實に對し默視してはゐられなかつたに相違ない。作者のこの氣魄は全篇を貫いて躍々としてゐる。

この書の翻譯に當つてわたくしが最も意を用ひたのはこの點であつて、作者がこの作をもつて興味ある讀物たらしむるのみならず、人生に何物かを寄與せんと欲する氣概をいさゝかなりとも傳へんとした事に存する。そこで譯文も出來得る限り平明にし、耳遠い表現を避けた。かゝる悲劇は一八四〇年代の佛蘭西の社會にのみあるのでは無い。現代の日本に於いても無數に生ずる事であらうと思ふ。この翻譯を世に送る事また徒爾ならざるを信ずる。

この翻譯に用ひた原書はカルマン・レヴィ書店刊行の流布本と、ネルスン刊行の通俗版とであつた。英譯をも參照し、今日迄日本に於いて上梓せられた殆どすべての翻譯を參考にした。なほ、新潮社々長佐藤義亮氏及び同社調査部員諸氏が極めて厳正に拙譯を幾度も／＼是正せられた厚意を厚く感謝する次第である。(高橋邦太郎)

(二) ドオデエと『サフオ』

アルフォンス・ドオデエ(Alphonse Daudet)の生れたのは、一八四〇年五月十三日、佛蘭西南部地方(ミデイ)のニームである。やゝ長じて、リヨン中學に入學したが、それも、「その日」に事缺く家庭と、毎日々々商賈ばかり變へてゐる父との爲めに、中途退學せねばならなかつた。

だが、彼が文學に對する執着は、既にこの頃から寄せられてゐた。この當時の事情を、レミ・ド・グウルモンはその日記の中で、次のやうに書いてゐる。

「一八七四年二月十六日 日曜日

今夜、フロオベルの家にて夕食す。その席にて、ドオデエは彼の早熟で貧に苦しめられた幼時を物語つた。——(中略)——當時彼は十二歳にも満たなかつたが、無數の本を讀んでゐたと言つてゐる。美しい詩集に情操を高められ、空想小説に頭を肥された。或る時は、河岸の舟を漕ぎ出して、その中で、家から盗み出して來た酒の酔に恍惚としながら、終日、本に讀み耽ることもあつたといふ。……」

かくて、その熱心さは、とう／＼、一八五七年十八歳のとき、彼を巴里に赴かしめた。その時巴里には、實兄エルネスト・ドオデエがゐたので、兄弟ともに、文學に専心することになつた。

後年の作『文學者の思ひ出』及び『巴里の三十年』は、その頃の彼等の氣儘な貧乏振りを、彼一流の才筆で描き出したものである。

かゝる生活の中から、彼の處女詩集、『戀をする女達』が生れた。そのうちの『梅』(Les Prunee)と題する八行詩は、

巴里のあらゆる文學的な集り、サロンなどにて語り傳へられ、有力な新聞はこの詩に對する讀者の寄書のために、數段の紙面を割いたほどであつた。

一八六〇年、彼は祕書として、モルニイ公爵の内閣に一八六五年までゐたが、その間に、同じ官廳の中で、エルネスト・レピンと相知るやうになり、最初の脚本『最後の偶像』を合作し、オデオン座に上演された。

それから、彼は數多の脚本、小説を書き上げた。だが、彼の領分は、何といつても小説にあつた。『タルタランド・タラスコン』、『月曜物語』、『總督』(Le Nabab)、『サフォ』(Sapho)、『小教區』(La Petite Paroisse)などは、その中でも有名なものである。

一八七〇年戦争が起つた時には、彼はひどい近眼であつたにも拘らず、かの有名な片眼鏡をかけ、頭巾のついた外套を着て、身を死地に曝さねばならなかつた。そして、この「われらの佛蘭西が蒙つた災害の親しき目撃者」として、『失踪者に送つた手紙』を、國を想ふはげしい熱情に驅られて書き上げた(一八七一年)。

一八七四年以後、彼は官報の演劇批評欄を受持つことになつた。そして、「非常に洗練された智識と愛情と親切とを合せ持つた妻に待つ」かれ、平穩な生活の中に、靜かに筆を執つてゐた。

だが、この隱遁生活のうちに、只一度だけ世間へ顔を出したことがあつた。一八八三年、アルベエル・デルビが、彼の作品を「シャトウブリアンの文體を眞似、ディッケンスを模倣せんとしたもので、作劇術に至つては全然無知である」といふ辛辣な批評を下した時である。憤怒したドオデエは決闘を要求し、その結果、アルベエル・デルビの腕を切りつけたとのことであつた。

彼が死んだのは一八九七年、彼の五十七歳の時で、文學史的に言へば、エドモン・ロスタンが、『シラノ・ド・ベルジュラック』を發表した年であつた。

「彼こそレアリストの作家であつた。この點はゾラも彼に譲らねばならない。」と、ジュール・ルメエトルが正しく言つた如く、自然に従つて描く、といふことが彼の獨得の方法であつた。藝術家として彼のあらゆる努力、あらゆる意志、あらゆる精力は、自然を完全に把握し表現することであつた。

だが他の一方に於て、彼を生み、彼を育てたミデイの朗らかな空氣が、一種の優しい情感が、時には激しい熱情にまで燃え上りつゝ、彼の心性の裡に、素直な成長を示してゐた。

更に、「フランスのディッケンス」と呼ばれるドオデが、ディッケンスの持つ幅の廣さ、思想の豊富さ、又増集せる群集の描寫の巧妙さなどに於て、遙かに劣つてゐるにも拘らず、彼はその代りに、より緻細なる純情、おのづからなる一種の貴族性、心情を洗練したるラテン系統の匂高い傳統、かゝるものを持つてゐたことも見逃すことは出来ない。又、氣取つてゐるといはれる彼の文章は、燃えるやうな愛をもつて、人間を、藝術を、自然をさがし求めてゐる。彼の希ふものは喜びであり、光であり、溫情であつて、暗黒でも陰慘でもない。晩年十數年間病氣に罹つてゐた、その或る日、かう呟いたのは彼にして初めて聞きうる言葉であつた。

「俺は、今まで餘り生命を愛しすぎてゐたんだ。だから、こんな罰を受けたのだ。」
更にアナートル・フランスをして語らしめよ。

「ドオデ氏の文體は、輕快で物柔かい。鋭く流れ出してゐるかと思ふと、急に短く途切れる。彼の洩す僅かな舉動や微かな笑ひの中に融け去つてしまふ。私はとき／＼、これで全體の構造がうまくとれるのかと危惧することもあるが、依然としてその文章は流れるやうに美しく輝いてゐる。繪のやうな言葉が溢れるばかりに充たされてゐる。」
筆者の貧弱の語彙を償ふ爲めに、更にエミール・ゾラの言葉を藉りてみよう。

「ドオデは常に、自由な精神に充たされてゐる。公式の前には極端に我儘であつて、事實の前では極端に謙虛であ

る。」

彼は、その故國「なつかしいプロヴァンス」に對して、魂の底からの郷愁ノスタルジーを持つてゐた。自ら常に、「巴里への亡命」者と考へてゐた。彼は屢々、巴里の人や風俗を寫さうとしたが、之等の作品には、彼の缺點が餘り出すぎてゐて成功したものは少ない。

最後にドオデエの一家に、文學的才能のある者が多かつたことを言つておかう。即ち、ドオデエ夫人は、筆致巧みな印象、感想をものしてゐるし、その兄エルネスト・ドオデエは見るに足るべき小説數篇、歴史に關する物語を書き、その子レオン・ドオデエは、「恐らく偉大になるかもしれない、よき作家」と言はれてゐる。

○

もとサフォ(Sappho)とは、紀元前六世紀頃、希臘文學がその華麗な美を誇つてゐた時分、才色双絶を謳うたはれた女詩人である。その抒情詩は、焰の如き熱情と、比たとひなき諧調を藏して、燃ゆるばかりの深き想ひと戀を歌ひ、殊に美貌の航海者パオンへの戀がかなはず、リコウカディアの巖頭から身を躍らしてその生涯を終へたといふ悲劇的な最後をもつて、後世の人々に美しい時代の華やかなる傳説を残してゐる。

ドオデエの『サフォ』はその女主人公、ファンニール格蘭が、ある彫刻家の爲めに、サフォのモデルになつたことによつて、かく名付けられたのである。數多の文人、畫家、彫刻家との、身を焼け焦すばかりの戀、その中に主人公ジャン・ゴッサンが、青春の血を投げ込み、カフェに、寢室に、舞踏會に、スケート場に、目まぐるしき戀の情史を續つづいてゐる。

(三) ダンヌンツィオと『死の勝利』

ことし六十五歳のガブリエレ・ダンヌンツィオは、今でもガルダ湖畔、カルニャッコの別荘を離れぬらしい。今年三月三日のガルドオネ發電は、病氣療養中のダンヌンツィオが、危篤に陥つたといふ報道をわが國の新聞にもたらした。その後何等の消息が無いところを見ると、大した病狀では無かつたらしい。

彼のカルニャッコの別荘は、もと百姓屋であつたものを、獨逸の建築師トオデが買つて、大戰前まで棲んで居た。それを買ひ取るについても、トオデ未亡人と、ダンヌンツィオの間に所有權の問題でうるさい爭議があつたが、それもどうか解決した。別荘はガルダ湖畔に聳える三階建てで、藍色の鍔戸が目印になる。窓を開けると、碧玉のやうな湖面の向う岸遠く、シルミオ全島が長々と横はり、北方は、深ぶかと白雪をかぶつた連嶺が靜かに流れて居る。シルミオには、昔、ラテンの有名な一詩人が棲んで居たと傳へられる。カルニャッコからは、端艇も出るし、停車場も近い。巴里への特別列車が十八時間毎に出るが、彼は別荘から動かうとしない。動いた所で汽車や端艇には便らぬだらう。四五年前、飛行機で、彼を巴里へ連れ出さうとした熱心家があつて、飛行機は別荘の庭園まで飛んで來たが、彼は彼のいはゆる「佛蘭西との痴話喧嘩」で、巴里行きを聞き入れない。銀翼は空しい失望を運んで、アルプスの峰影に隠れてしまつた。

一體このガルダ湖は獨逸人の好きな湖水で、ゲエテも伊太利へ行くにこゝを通つた。ダンヌンツィオがこの別荘を買ひ取つてから、家も庭も、彼一流の手入れて今では伊太利の一名物となつて居る。たゞしかし、「ダンヌンツィオに面會するのは、駱駝が針の目を通るより面倒だ」といふのが、この邊の通り言葉になつて居る。それでも彼がヒュウメに

居た頃は、新聞記者、大臣、高官、等、等を片つ端から面會謝絶しつゝけたが、並みの兵士だけは、手がるに近づくことが出来たさうだ。

彼は贅澤屋で昔から通つて居る。彼は飽くを知らぬ文明享樂の貪食者である。彼の手に入つたトオデの質素な邸宅は、見る間に、豪華な金満家の城廓に變つた。その前は、彼は佛蘭西の北方ランデに棲んで居たが、一九一四年、母國伊太利が、いよゝゝ世界戰爭の仲間入りする模様になつたので、彼は倉皇とランデを去つて故國へ歸つた。昔ガリバルヂが、一萬人を率ゐて出帆したクオルト、そこを羅馬とでの彼の雄辯は、見るまに伊太利を聯合國側に飛び入らした。これからの彼はもう歴史上の巨人である。戰勝各國政治家の腹黒さを見破り、ヴェルサイユの國際會議を無視し、軍隊を率ゐて、突如フユウメを占領したのも彼である。それから六ヶ月後、伊太利とユウゴオスラヴィヤ間のラッパロの條約によつて、伊太利の正當な權利が認められたのは、一九二〇年の秋であつた。凱旋將軍として、愛國志士としての彼は、もうその上、國民同志の内紛に入りこむのを避け、少數の部下と共に、ヒユウメを去つてこのガルドオネに落着いた。彼の功績は、國民と國王によつて感謝され、光榮あるモンテ・ネヴォソ公の爵位を授けられた。モンテ・ネヴォソは、伊太利新領土の中にある小山の名である。新公爵は、金製の槌と、紅寶石を鑲めた指環を、首相ムッソリニに贈つて謝意を表した。

ガブリエレ・ダンヌンツィオは、十九世紀末の世界文壇が生んだ最も偉大な藝術家の一人であり、最も赫奕たる最後の殘照であらねばならない。彼は一八六四年、ベスカラに生れた。ベスカラの自然美は、『故郷物語』(Tales of My Native Town)の十二篇の短篇に、輝かしく回想されて居る、『夕日はグラン・サップの山影に落ちやうとして、濕つた大地から、海面から、河表から、池上から、水蒸氣が夢のやうに立ち昇る。家並を、船の帆を、橋を、樹海を、薔

微色の餘光がほのかに色どり、透明であつた風景も、人間の姿もあらゆるものは黄昏の薄明に包まれて、それを包む輪廓の線條だけが、褪めて行く光波の中にゆらいで居る……」。後年の偉大な耽美詩人は、かうした美しい自然の裡に、少年の詩夢を培はれたわけであつた。また彼は二三年前から、三部作『火花と雪床』といふ小説に著手したといはれ、その第一編かどうかは知らぬが、『冒險をせぬ冒險家』といふ長篇小説が、ミラノで出版されやうとするといふ雜誌記事を読んだ記憶がある。前半は、希臘神話を中心とし、ヘブライ的思想に反抗して、神が人間に與へた歡樂と唯一の法悦とをどこまでも主張する。彼の藝術感の機軸はいつもこゝにあるが、後半は彼のベスカラでの少年時代の追憶を入りませたものだ。學校の博物館から盗み出したベリカンの骨に、神祕的な想ひを寄せるとか、彼が十二歳の子供として、十分に音樂の神祕を理解するにかゝはらず、ピアノの教師が、彼のしなやかな、形の整つた手を、鍵盤に押しつけて、無理な教授するのに、彼がひどく反抗したといふ回想を捉へて居るとやら。この少年が十七歳になつて、『早春』なる詩集一卷を發表し、翌年に『新謠』(新しき歌)を、そのまた翌年に『インテルメッツォ』を續けさきに發市して、詩人としての地歩を文壇に認識したのも怪しむに足りない。續いて短篇物語集『處女地』、『サン・パンタレオーネの書』が出る。詩集もその間に二部まで出たが、一八八九年二十四歳の青年として、小説『快樂』を提供するや、作家としての名聲が、たちまち目が覺めたやうに騒ぎ出された。續いて一八九二年には、『罪なきもの』、邦譯名『犠牲』と、『ジョバンニ・エビスコーボ』が出る。それから二年を経て、『死の勝利』(Trionfo della morte) が現はれた。この時、ダンヌンツィオは、廿九歳であつた。それから二年目の一八九六年に『巖上の乙女達』が出版された。『犠牲』『死の勝利』『巖上の乙女達』の三部は『I Romanzi della Rose』即ち『薔薇の小説』の名の下に總括されるものであり、別に『柘榴の小説』の連續小説を作らうとする意志があつた。尤も彼の作物はこれのみに限らない。一八八九年四幕の悲劇、『ラ・ジョコンダ』、一九〇一年の五幕悲劇『フランチェスカ・ダ・リミニ』、一九一一年の神祕劇『サン・セバスチアンの殉難』小説

『焰』(又は『火』)、五幕悲劇『死都』その他の作物があり、最近には『夜曲』なる作物に執筆して居るといはれる。

恐らく小説家としての彼の生涯の最大傑作は、『死の勝利』であらうと云はれる。中には『犠牲』こそ『薔薇の小説』の最高位だと評するものもあるが、いろんな意味から、やはり最後の投票は『死の勝利』に落つる。ダンヌンツィオは、『死の勝利』の完成に五年間を費やし、もつとも早く、伊太利と佛蘭西の批評壇に於いて、この作こそは、彼の藝術の最高頂だときはめをつけられた。それは十九世紀末の懷疑思潮を、どの頁にも満たした一線から、劃期的な作物と認められても良し。彼の作中で一番早く英譯され、比較的早く日本人の間に知られたのも、忘られぬ追憶である。

さてダンヌンツィオの人格と、彼の藝術の特性を、一目で分るやうに梗概することは誰にとつても困難な事業である。けれども、彼が南國的、ラテン的であり、徹底耽美至上主義者であり、非基督教教であるといふことは、彼の藝術の特徵の明かな一隅を語ることになるかも知れない。彼の作物ほど、彼の時代、教養、思想、熱情、趣味、惑溺を、ユニークに語るものはない。さう言へば、『薔薇の小説』の三部の主人公は、みな別名の下に生きるダンヌンツィオ自身である。彼の作物を通じて、火柱のやうに最も力強く色づけるものは、極めて肉感的な、戀愛と情熱の法悦でなければならぬ。それが『死の勝利』に於いて高潮に達する。かくてわれ等がドストエフスキの『罪と罰』の中に、深刻な精神的苦悶を發見し、ゾラの自然主義現實の中に、愛慾の渾沌を共感するやうに、われ等は『死の勝利』の中に、渦巻く情熱の急湍を再感するのである、この點に於いて『死の勝利』は、近代文壇の一つの奇蹟だと云つてよい。ダンヌンツィオの強みの一つは、その豊富で、絢爛で、自由で、あらゆる語彙の魔術を支配する恐るべき技巧にある。げにや彼は金色の翼に身を乗せて、熱烈な情火の中に、焼け爛れるまで亂舞すべく突駈するのである。

『死の勝利』は、自我的、情熱的な一男性と、同じ激しい愛着に押し流されて行く一女性との、伊太利的戀物語であ

る。祕密な、悲しい自棄の戀によつて初まるこの物語は、遂にヂオルデオとIPPORIタを死の破滅に導いて行く。西洋には珍らしい心中物語である。肉と魂との永遠の争闘が、一步々々生長し、變化し、果ては一つの領域に吸収されてしまふまでの、人間苦の記録でもある。それは満足がひながら、どうしても満足し得ない欲望の喰ひ違ひであり、しかも死の背後にも、つひに永遠に満たされない欲望でもある。これこそ人間の魂の中で、最も深刻で複雑な悲劇ではないかと、作家は我等に問ひかける。彼は、近代的幽霊に追ひつめられて居る。疑つて疑つて、どうしても信じきれない悲惨な異教者がそこにある。冷酷至極な自我狂が他方にある。どす黒い憂鬱のみが喪衣のやうに彼等の心境を取り圍む。たとへ、名はヂオルデオでなくとも好い、IPPORIタでなくともよい。憂鬱を死ぬやうに欲求しながら、遂に獲得の法悦に酔ひ切れぬところの、近代人間の全部が、みなこの二人の影に生きて居る。これが惡魔の聖書として、世界的近代文學の古典として、食るやうに世界的に讀み耽られたわけであらう。さうだ。この「法悦と藝術の詩人」と呼ばれ、「女性と藝術の作家」と符牒づけられて居るダンマンツィオでなくて、また南國的な、あまりに南國的な彼でなくて、他のどんな作家が、かうした深刻な、地獄的な題材を拾ひ出し、誰がこんなに殘忍な、陰慘な、複雑な、戰慄するやうな戀愛心理と愛慾葛藤を、神の怖れなしに描寫し得るものがあらう。

新聞は傳へる。ダンマンツィオは、堅牢美麗な一大劇場をポエト・半ラ・ビクトリアルに建設することとなり、『ジョリオの娘』を開演したトリ高の全部を、同劇場建設資金にあてる事にした。この野外劇は、昨年の九月十一日に實行され、有名な俳優が全部出演した。観客數千人の中から、彼自身で六百人を選び出し、特別公演の特權づき入場料として、一人前一千リラといふ驚くべき高價な觀覽料を徴した。羅馬劇場が完成した曉に、そしてダンマンツィオの死後、この劇場は國民的記念物として、國家の名で保存されるであらうと。

また傳へる、伊太利國王と首相ムツリニ、その他、多數の賛助員を含んだ連名の下に、ダンヌンツィオ全集が、ミランから出版されることになり、すでに第一巻が出来上つた。装幀なり、用紙なり、印刷なりの贅澤さは伊太利に前例が無いであらう。全集は、全部で五十巻、定價が一萬リラ、出版所は政府の補助で出来て居る。それに對して羅馬法王が激怒した。むきになつてこの出版を禁止しようとする。カトリック教が、沒道義と異教思想をむきになつて攻撃して居るダンヌンツィオのやうな人間の出版に、援助を與へるのが怪しからぬといふのである。これも一つの愛嬌であらう。が、ダンヌンツィオの名は、だんくゝと過去の光榮の中に沈みつゝある。ダンヌンツィオを、老大家、既成作家の排列中の、最も雄大な作家として位を付けることは、誰しも躊躇せぬであらう。事實、彼は特殊に完成された作家である事を誰が疑はう。老と、大との榮冠を與ふるに、彼ぐらゐふきはい作家は、どこにも見出し得ないのであるから。だから彼が世界の文壇に於いて、近代人の偶像であつたことは怪しむに足りない。それとても、幾多の缺陷が、彼の藝術の中に潜^{ひそ}んで居たことは争へない、たとへば沸騰點を忘れた彼の情炎が、北國的な理智の觀照や、人間性格の構成を飛び越してしまふとか、誇張的だとか、氣取屋だとか、その他等、等。が、彼はロマンチストでありながらリアリストであり、彼の纖細な心臓の脈搏と、假借のない彼の現實注視からは、どんな奥底にある祕密でも、微妙な欲望でも、みな見とほしてあつた。その神性が世界を驚かした。しかし今日のこの老大家は、たとへ新しい業績を發表したとしても、もう昔日の魅味と情熱で、普通り世界の讀者をつないでゆけるか、どうか。

たゞ、こゝに一卷の「青春の書」がある。名は『死の勝利』、單にこの一卷だけでも、何ものにも代へ難い藝術的、人間的價値を保ち、青年子女の胸に、南國の天才ダンヌンツィオの映像を、久遠に彫り殘すであらう。(千葉龜雄)